

How to make Comfortable residence for Wheelchair user

新築・リフォーム

車いすでも

快適に生活できる

住まいのつくり方



一級建築士 岡村 英樹

はじめに

この本は、今からまさに「住まいづくり（新築・リフォーム）」を検討されている**車いすユーザーやそのご家族のため**に書きました。

住まいづくりは、生活する上での様々な願望を実現してくれるかも知れません。例えば・・・

今までは苦勞して家の出入りをされているとすれば、疲れを気にせず、いつでも楽にすーっと出かけられる。

トイレの使い勝手が悪いので、水分を摂るのを控えている方なら、これからは気にせず好きなだけ飲める。

今までシャワー浴しかできななかった方が、新しくなった住まいでは、ゆっくり浴槽につかってリラックスできる。

車いすでも究極に使いやすいキッチンになったら、毎日の料理が楽しくなる。

腰痛に耐えながら、ご家族を抱えて介護されている方なら、体を壊してしまう不安から解放される。

住まいづくりによって、このような可能性がどんどん広がってきます。もちろん、全てが実現するかどうかは別としても、一つ一つは決して不可能なことではありません。

しかし一方で、心のどこかに不安や心配はないでしょうか？

高い買い物だから、絶対に後悔だけはしたくない……。

今、相談している建築業者に任せて大丈夫だろうか……。

予算内で、どこまで実現できるんだろうか……。

住まいに夢や理想を追いかけながらも、なぜ、こういった不安があるのでしょうか。それは、**安心して相談できる中立的な立場の専門家がない**という点に尽きると思っています。

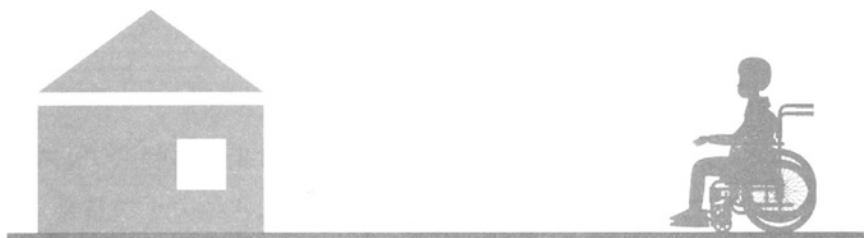
この本は、中立的なアドバイザーの視点で書いています。住まいづくりの不安の解消に少しでも役立つ事が、この本の目的です。

このまえがきを読んで、思い当たる点があるようでしたら、ぜひ、本書をあなたの住まいづくりに役立ててください。

一級建築士 岡村 英樹

— 第 1 章 —

“バリアフリー”を信じたばかりに



▶ 夢の裏側に潜む“リスク”

車いすユーザーが住まいづくりで失敗されるリスクは、一般住宅の場合よりもはるかに高いと思います。オーバーに言っているわけではありません。私もこれまで、残念なケースを数多く見聞きしてきました。こういう事は一般にあまり知られていません。失敗した方は、自分の家のことをあまり語ろうとはしないからです。また、暮らしにくいというだけでは、「欠陥住宅」とは呼べません。ですから、社会問題にもならないのです。

住まいづくりには、夢があります。「デザインなんてこだわりはないよ…」と言われていた方でも、いざ壁紙や照明器具を決める打ち合わせを始めると、生き生きされてきます。しかし、その夢の裏側にはリスクもあるのです。

次にその事例（実話）を紹介したいと思います。

※プライバシーに配慮して仮名にしています。

【ケース 1】 新築したばかりなのになぜ!?

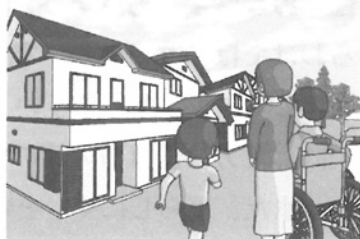
桜川さん（仮名）は、30代の男性です。友人達とスキー中の事故で頸髄を損傷し、車いすでの生活になりました。

会社の上司からは、「なんとか、2年以内に戻ってきて欲しい。」

と言われました。とても頼りにされる存在だったようです。

そのためには、やはり快適に暮らせる家が必要だと強く感じていました。住んでいた家はかなり古く、リフォームが難しいと判断して、家の新築を決意します。

住宅展示場を見て回り、デザインが気に入ったハウスメーカーに依頼することにしました。



担当者は、最初こう言っていました。

「バリアフリーならお任せください！」

しかし、打ち合わせを重ねるごとに、どうやら障害者のことも車いすのことも、あまり理解していない事が分かってきました。

そしてやはり、出てきた図面は、全く生活しやすいプランではありませんでした。

何度も図面を描き直してもらいましたが、最後まで納得のいくものにはなりません。しかし退所までの時間がないので、着工に踏み切ります。桜川さんの頭の中は、とにかく一日も早く職場に復帰することで一杯だったのです。

数ヶ月後、桜川さんは、完成した家を見て愕然としました。要望通りになっていない所が、たくさんあったのです。

便器は、打合せしたはずの位置につかない…。

浴室のシャワー水栓の位置が悪く、手が届かない…。

トイレの入り口が、想像以上に狭くて入りにくい…。

トイレもお風呂も日常生活の中でとても重要です。簡単にあきらめるわけにはいきません。

「私どもは、契約通りに家を建てさせていただいただけです。」

メーカーの言い分は、この一点張りでした。議論をしてもらいがあきません。結局、新築したばかりなのに、数百万円かけてリフォームすることになったのです。費用は、桜川さんが負担しました。



【ケース 2】 バリアフリーはバリアフリーなんだけど・・・

浅見さん（仮名）ご夫婦（30代）の長女・麻理子さん（中学1年生）は、生まれつきの障害（脳性まひ）があります。車いすで養護学校へ行っていましたが、家では奥様が介護していました。

麻理子さんは、自分で言葉を話すことはできません。でも、まわりのみんなが話していることはよく分かっています。休日は、家族でドライブするのが大好きです。

今までは、賃貸マンションに暮らしていたのですが、家を新築することにしました。お母さんが、抱え続ける介護に限界を感じていたからです。とにかく、介護が楽になる家にしたいと、心の底から強く希望していました。

浅見さんの奥様は、以前から住宅雑誌を見るのが大好きでした。雑誌で知った女性の建築士に、家の設計を依頼しました。

完成した家は、浅見さんたちが求めていた以上の素敵なデザインでした。浴室やトイレのスペースを十分広くとったのも正解でした。

ところが、生活してみると、いろいろミスをしていたことが分かったのです。その一つは外出用のスロープです。設計の時には、ここまで急なスロープだとは気づかなかったのです。



「バリアフリーの基準で設計しています」

建築士からは、確かそのように聞いていました。

また窓から出入りすることで、もうひとつ問題があることが発覚しました。外出する時、外から鍵をかけられないのです。設計の段階では、そこまで気がつきませんでした。実際に、生活してみ始めて分かったことばかりです。

新しい家ができたら、今までと違って、苦労なくスムーズにお出かけができることを、楽しみにしていました。期待が大きかっただけに、浅見さんご夫婦にとっては、とてもショックでした。



2つのケースをご紹介しました。実は、この方々には共通点があります。それは、**住まいづくりの大切さを十分認識していた**ということです。だからこそ、情報収集も十分に行い、打ち合わせも丹念にしたつもりでした。また、担当した建築士が手抜きをした訳ではありません。むしろ、まじめに取り組んでくれたと言えるでしょう。

にも関わらず、どうしてこのような失敗が起きてしまうのでしょうか？ 次の章で失敗の原因を、詳しく見て行くことにしましょう。